

大学生の短期海外研修の効果：学生の自信感形成要因の観点から

伊 佐 雅 子

要 旨

本研究は、大学が実施している短期の海外研修プログラム（ハワイ研修、海外幼児教育研修、海外ボランティア実習）が学生たちの自信感にどのように影響しているのかを調べた。調査の結果、「自信感」には4因子（「自己肯定感」、「人間関係構築力」、「有能感」、「立ち直り力」）が抽出された。従来、能力的側面や自己評価的側面が重視されていた自信であるが、本研究では「生きる力」にも大きく関連している「人間関係構築力」と厳しい状況から「立ち直る力」も含んでいる。

海外ボランティア研修参加者は、語学研修参加者に比べ、参加前、参加後とも「自信感」が高く、特に「人間関係構築力」と「立ち直り力」は高かった。一方、語学研修者と海外幼児教育参加者の「自信感」の伸びがみられた。今後は、「自信感」尺度に加え、「自己効力感」尺度も入れて、大学生の海外研修の効果を調査していきたい。

キーワード：大学生、海外研修、短期、ハワイ（語学）研修、海外幼児教育研修、海外ボランティア研修、自信感形成要因

1. 調査の背景

近年、異文化体験を持つ日本人の数は増加しているが、国際的に活躍できる人材の不足が指摘されてきた。そこで、政府は2011年4月、グローバル人材育成推進会議で、「産学官によるグローバル人材育成のための戦略」を打ち出した。この「グローバル人材」の概念には、(1) 語学力・コミュニケーション能力、2) 主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、3) 異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティを持つ人としており、中等教育におけるグローバル人材育成の課題として、英語教育の強化、高校留学の促進、教員（主に、英語担当）の資質・能力の向上を挙げている。

大学もまた、グローバル人材の育成のため、学生たちに国際的な視野を持たせるとともに、海外留学への機運を高めることが求められ、留学の機会が増加した。自文化とは異なる文化の習慣・考え方に触れることは、自文化にはない習慣・考え方を新たな考え方や経験として取り込むこととなり、個人が持つ価値観に影響を与える要因となる（中村・石井、2010）。

また、短期の異文化体験や語学の成果は、英語を学ぶ意欲の高まり、積極的な態度の育成、自分の考えを伝えようとする意欲の高まりや、

自己の見つめ直し、長期の留学への関心の高まりなどが報告されている（仲野、2014）。自己意識や能力などの調査研究では、留学経験による自尊感情、自己効力感の上昇（早矢仕、2002）、現実自己意識、意欲項目、理想自己意識傾向の大きな変化（中村・石川、2010）や、オープンネス・民族相対主義、国際情勢への関心、対人コミュニケーション・スキル、自己効力感の高まり（Yashima, 2010）が指摘されている。

本学においては、短期海外研修（「ハワイ（語学）研修」、「海外幼児教育研修」）と4大が提供する「海外ボランティア実習」があるが、これらのプログラムの成果についての研究はあまりなされてこなかった。そこで、本論文では、大学が実施している短期の海外研修プログラムは学生の自信感にどのように影響しているのかを調べた。

2. 調査の目的

本調査の目的は

- 1) 短期であっても海外経験には自信感を向上させる効果があるのではないかと、
- 2) 外国語を学ぶ語学研修よりも外国語でボランティア活動をする参加者の方が自信感は伸びるのではないかと、
- 3) 海外体験はキャリアプランにおける国際

志向性を高めるのではないかの3つの事柄である。これらの調査結果から、海外派遣に関するいくつかの提言を行う。

3 調査方法

3-1 調査協力者

調査協力者は50人で、参加前と参加後の両方に回答した有効回答は46であった（有効回答率は92%）。

3-2 調査手順

実施時期は2015年1月から10月までである。アンケート調査は渡航前と渡航後の二回行った。渡航前のアンケート調査（対象者：「ハワイ研修」と「海外幼児教育研修」参加者）に関しては、2015年の1月20日の国際平和文化交流センター主催の海外研修オリエンテーションに参加し、学生に調査目的を話し、了承を得てから実施した。帰国後のアンケート調査は、春休みに入ったため、学生の自宅に郵送し、返送してもらう予定であったが、うまく回収できなかったため、国際平和交流センターの職員の協力を得た。

また、「海外ボランティア実習（フィリピン）」に参加する学生に関しては、科目担当教員の協力を得て、2015年8月17日の事前研修に参加し、アンケート調査を実施した。帰国後のアンケート調査は10月6日から8日の間に実施した。

3-3 質問項目

これらの質問項目は、国際教育交換協議会（CIEE）のアンケート調査「海外体験プログラム」の内容を参考にして、作成した。

第1回と第2回目の質問項目は以下の通りである。

<第1回調査（出発前）>

- 1) 性別、年齢、参加するコース
- 2) 過去の海外滞在期間（年/月/週）
- 3) 保有する英語資格試験の成績（TOEFLテスト、TOEICテスト、英検、GTEC、その他）
- 4) 海外滞在中に使用する言語の使用不安感
- 5) 高井（2011）が開発した自信感尺度
- 6) 1年間交換留学の希望
- 7) 海外の大学院で学ぶ希望

- 8) 外国語を使う仕事に就く希望
- 9) 海外で働く希望

<第2回調査（帰国後）>

上記の項目以外に、「海外研修で楽しかったこと」と「海外研修で大変だったこと」の質問を設け、自由に書いてもらった。

選択回答法による評定は6件法を用いた（一例：「1 全く当てはまらない」「2 あまり当てはまらない」「3 どちらかと言えば当てはまらない」「4 どちらかと言えば当てはまる」「5 かなり当てはまる」「6 非常に当てはまる」）。

3-4 自信感尺度と自己効力感尺度

大学生および大学生を除く成人男女20代～70代を対象に調査を行い開発された高井（2011）の自信感尺度を使用した。「自信感」とは人が「自分のあり方に自信を持っている感覚、あるいは自分に対して自信を持って生きていくと感じられていること」と定義する。この尺度は14項目からなり、評定は「1. 全く当てはまらない」から「6. 「非常に当てはまる」の6尺度法である。

「自己効力感」（Self-efficacy）とは、社会的学習理論あるいは社会的認知理論（Bandura, 1977）の中核をなす概念の1つであり、個人がある状況において必要な行動を効果的に遂行できる可能性の認知をさす。ある問題の課題に対する自己効力感を自分がどの程度持っているのか、個人の行動の変容を予測し、不適応な情動反応や行動を変化させる、と指摘されている（板野、1989；板野・東條、1986；成田他、1995）。つまり、自己効力感とは行動の変容を予測する要因であるといえる（坂野・東條、1993）。シェラーら（1982）のSE尺度（23項目）を邦訳した特性的自己効力感尺度を使用した。評定は「1. 全く当てはまらない」から「6. 非常に当てはまる」の6尺度法である。

本論文では、紙面の都合で「自信感」尺度を使った結果のみを述べる。

3-5 データ分析方法

IBM SPSS Statistics 17.0を用いて分析した。海外体験が「自信感」やキャリアにおける「国際志向性」、「外国語使用不安感」にどのような

影響を与えるかを検証するために、対応のある t 検定を用いて参加前後の測定値の変化を検討した。また、参加前後 (以下、Pre・Post) 要因と、参加プログラムによる組み合わせが、「自信感」や「国際志向性」にどのような影響を与えるのかを検討するために分析を行った。

4. 結果

4-1 調査協力者 (q1)

調査協力者は 50 人で、平均年齢は 21.10 才 (SD =7.86) である。18 才 (1 人) (2%)、19 才 (28 人) (56%)、20 才 (14 人) (28%)、21 才 (4 人) (8%)、23 才 (1 人) (2%)、と 社会人学生は 2 名 (57 才と 61 才) (4%) である。

ハワイ (語学) 研修と海外幼児教育研修に参加した学生は 30 人で、平均年齢は 21.87 才 (SD=10.14) である。全員が女性である。18 才が 1 人 (3.3%)、19 才が 23 人 (76.7%)、20 才が 3 人 (10.0%)、23 才が 1 人 (3.3%)、57 才が 1 人 (3.3%)、61 才が 1 人 (3.3%) である。海外ボランティア実習に参加した学生は 20 人で、そのうち 2 人は男性である。平均年齢は 19.95 歳 (SD=0.68) で、19 才は 5 人 (25%)、20 才は 11 人 (55%)、21 才は 4 人 (20%) である。

参加前と参加後の両方に回答した有効回答は 46 であった (有効回答率は 92%)。目的別による内訳をみると、ハワイ語学研修の協力者は 12 名 (短大英語科 9 名と英コミ 3 名) (25.5%)、海外幼児教育研修の協力者 (短大保育科) は 16 人 (34.0%)、海外ボランティア実習 (フィリピン) (英コミ) の協力者は 18 人 (38.3%)、その他 1 名 (2.1%) で、個人的に、アメリカのホームステイプログラムに参加した学生であった。

目的別協力者の居住形態は、実家で家族と同居が 45 人 (97.8%) で、その他 (兄妹と同居) が 1 人であった。この結果より、海外研修は学生たちにとって、はじめて家族と離れる機会となっていた。

4-2 過去の渡航経験 (q2)

調査協力者 47 名のうちで、31 名 (66%) の人達は、過去の渡航経験はない。ハワイ語学研修と海外幼児教育研修に参加した学生 (29 名) の中で、21 名 (72.4%) の人達は海外体験はなかったが、8 名 (27.6%) は観光や語学研修の目的で

海外を訪れていた。主な渡航先は、英語圏 (アメリカ、カナダ、イギリス、オーストラリア)、フランス、トルコとアジア (中国、台湾、フィリピン、シンガポール、マレーシア、ベトナム) であった。

海外ボランティア研修に参加した学生 (18 名) の中では、10 名 (55.6%) は、過去の海外体験はなかった。海外体験のある学生 (8 名) の中では 2 名 (11.1%) が 10 カ月のアメリカ留学、6 名 (33.3%) は観光で、アメリカ、カナダ、ニュージーランド、シンガポール、マレーシア、フィリピン、台湾を訪れていた。

4-3 今回の海外滞在期間 と研修内容

春の語学研修 (ハワイ) と海外幼児教育研修 (ハワイ) はそれぞれ、約 2 週間のプログラムで、今年は 2 月 12 日から 2 月 27 日まで行われた。また、夏の海外ボランティア実習 (フィリピン) は約 1 週間であり、今年は 9 月 1 日から 9 月 8 日まで実施された。

語学研修 (ハワイ) は、本学協定校の Kauai Community College にて、観光ビジネスについて学ぶ。短大 (英語科) と 4 大の学生が参加し、英語の勉強だけではなく、ハワイの歴史・文化を学び、フィールドワークとして、リゾートホテルやホームステイ、現地学生等との交流を通して、ハワイの自然環境・伝統文化について学べる。今年は、ESL (英語) と Tourism の授業、ハワイの文化学習 (Hula Workshop, Hawaiian Culture, Japanese /Okinawan in Hawaii など) があった。

海外幼児教育研修は短大の保育科の学生のためのプログラムで、ハワイ語を公用語とする幼児教育施設で見学や体験学習を行い、日本とは異なる幼児教育や保育について学ぶものである。今年は、幼児教育 (Early Childhood Education in Hawaii) の授業、Preschool 見学、ハワイ語イマージョン教育施設の見学、ハワイの文化学習 (Hula Workshop, Lei-making Workshop, Singing Workshop, Japanese/Okinawan in Hawaii, Hawaiian Culture)、Practice with Ryukyu Taiko Group, Eisa Performance, ホームステイと観光があった。

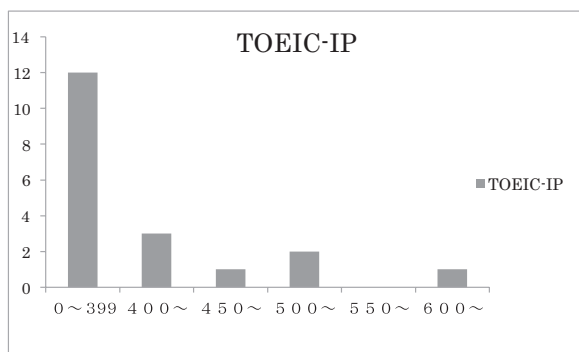
また、海外ボランティア実習 (フィリピン) は、現地の大学や NGO、コミュニティでのボランティア

ア体験を通して、途上国の現状と課題を学ぶプログラムである。この研修は、4大の「海外ボランティア演習」の科目を受講した学生のみが、海外ボランティア研修に参加でき、「海外ボランティア実務士」の資格が取得できる。今年、マザーテレサの施設、サンマテオ都市スラムコミュニティ、Smokey Mountain (マニラ最大のごみ処理場)、川沿いスラムの生活環境視察、マニラ湾ナポタス地区海岸沿い水上生活者の現状視察、ケソン市ごみ処理場、政府土地開発都市プロジェクト見学とホームステイ (1日間)があった。

4-4 調査協力者が有する外国語資格試験の成績 (q4)

本調査では、TOEICテスト、英検と中国語資格試験の結果が報告された。TOEICの試験では、TOEIC IPテストを受けている学生が19名おり、スコアは175点から675点までであった。英語のレベルからみると、レベル1 (~399点) (63.2%)が12名、レベル2 (400~) が3名 (15.8%)、レベル3 (450~) が1名 (5.3%)、レベル4 (500~) が2名 (10.5%)、レベル5 (600~) が1名 (5.3%)であった。スコアからは、Elementaryから、Lower Intermediate, Intermediate, Upper Intermediate、Advanced, Proficientのレベルに位置している。

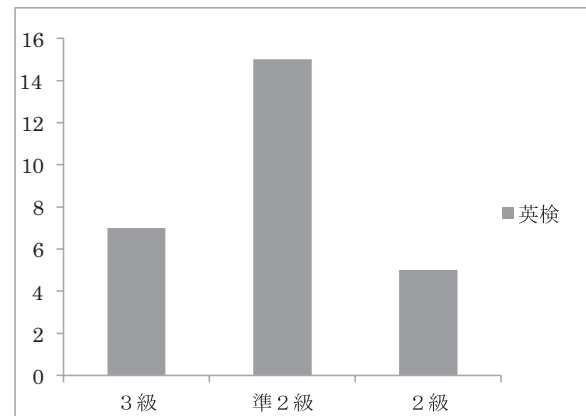
図1 保有する英語資格試験の成績 (有効回答19)



また、英検では27名 (60%) が資格を持っていた。3級を取得しているのが7名 (25.9%)、準2級が15名 (55.6%)、2級が5名 (18.5%)であった。日本人が求められる英語力の具体的な指針として、外国語能力の向上に関する検討会 (2011) が「高等学校卒業段階では卒業者の平均が英検準2級から2級程度」を提言してい

る。本調査協力者の場合、高卒のレベルの英語力をつけている学生が20名 (74.1%) いる。

図2 英検の取得状況 (有効回答27)

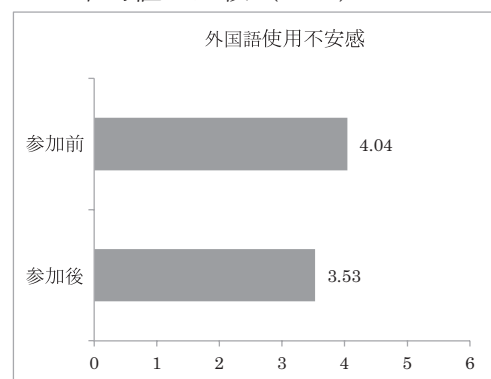


英語以外には、2名が中国語の資格試験 (準4と4級) を取得していた。

4-5 「外国語使用不安感」 (q5)

「外国語使用不安感」は6件法で評定された。6は「非常に不安だ」、1は「全く不安ではない」を意味する。参加前の平均値は4.04 (SD=1.29)であり、参加後は3.53 (SD=1.01)であり、0.1%水準で有意に不安は減少していることが示された。つまり平均値は、「4どちらかと言えば不安だ」から「3どちらかといえば不安ではない」に下がったことを示唆している。

図3 参加前と参加後の「外国語使用不安感」の平均値の比較 (N=47)



目的別では、参加前は、語学研修グループは平均値が4.67 (SD=1.15)で、海外幼児研修グループは4.31 (SD=1.13)、海外ボランティア実習グループは3.50 (1.24)であり、有意な差がみられた ($F(2, 43.)=3.91$ $MSe=1.41$ $p<0.05$)。

表1 「外国語使用不安感」分散分析表
(一元配置：対応なし)

変動因	平方和	自由度	平均平方	F	
プログラム別	11.048	2	5.524	3.919	p<.05
誤差	60.604	43	1.409		
全体	71.652	45			

また、多重比較 (Turkey HSD 法) の結果、語学研修グループと海外ボランティア実習グループとの間に5%水準で有意差がみられ、語学研修グループの方が有意に不安が高かった。

参加後に関しては、語学研修グループの平均値は3.75(SD=0.75)、海外幼児研修グループは3.56(SD=1.09)、海外ボランティア実習グループは3.33(SD=1.13)で、グループ間で有意な差はみられなかった (F(2,43)=0.60 MSe=1.07, n.s)。

4.6 「自信感尺度」に関する検討

4-6-1 「自信感尺度」の記述統計と t 検定

「自信感尺度」の参加前と参加後の平均値とSDの結果は以下のとおりである。

表2 自信感尺度の平均値およびS

	渡航前		帰国後		t 値
	平均値	SD	平均値	SD	
1. 私は自分の仕事(役割・勉強など)をうまくこなす力がある。	3.91	0.74	4.11	0.75	1.84
2. 私は自分の欠点ばかりが目につき、自分がいやになる。*	3.74	1.09	3.85	1.26	0.61
3. 私はいろいろな人間関係をととても楽しいと感じている。	4.74	0.98	4.62	1.20	0.71
4. 私は失敗やうまくいかないことが多いと感じている。*	3.98	1.05	3.89	1.04	0.55
5. 私は少々つらいことがあっても乗り越えていく力がある。	4.53	0.88	4.45	0.82	0.64
6. 私は人間関係がうまくいかないことが多い。*	4.40	0.94	4.36	1.09	0.30
7. 私は何をやってもダメな人間だと感じている。*	4.49	1.22	4.85	1.10	2.51*
8. 私は能力のある人間だと思う。	3.43	1.03	3.55	1.11	0.90
9. 私は、ささいなことでも落ち込み、なかなか立ち直れない。*	4.62	1.19	4.28	1.22	2.69*

10. 私はいろいろな良い素質をもっている。	3.79	0.90	3.98	1.05	1.64
11. 私にとって人間関係は苦痛である。*	4.66	1.08	4.83	1.14	1.01
12. 私は、何かうまく行かないことがあるとすぐにくじけてしまう。*	4.23	1.04	4.38	1.11	1.04
13. 私は自分に対する不満が多い。*	3.57	1.17	3.51	1.42	0.46
14. 私は大抵の人とうまく付き合っていくことができる。	4.30	1.04	4.36	1.05	0.62

*逆転項目

*p<0.05

次に、各項目に対して、参加前と参加後の間の平均値の差に関する t 検定を行った結果、2項目(「7. 私は何をやってもダメな人間だと感じている」と「9. 私は、ささいなことでも落ち込み、なかなか立ち直れない」)に、統計的な有意差 (t(46)=2.37, p=0.016, t(46)=2.69, p=0.010) がみられた。この結果より、海外での異文化体験によるカルチャーショックやトラブルを経験し、「何をやってもダメな人間だと感じている」傾向が増えていると考えられる。しかし、逆に、このカルチャーショックを体験することで、成長し、「ささいなことでも落ち込み、なかなか立ち直れない」の平均値が少し減少していることがわかる。

4-6-2 自信感尺度の因子構造

自信感尺度の14項目を用いて主因子法(バリマックス回転)による因子分析を行った。因子数は、解釈可能性から4因子を抽出した(表3)。4因子の累積寄与率は、62.11%であった。第1因子は“自分の欠点ばかりが目につき自分がいやになる(逆転)。自分にたいする不満が多い(逆転)。何をやってもダメな人間だと感じている(逆転)。ささいなことでも落ち込み、なかなか立ち直れない(逆転)。失敗やうまくいかないことが多いと感じている(逆転)”といった項目に高い負荷量が見られた。得点化の際にはすべて逆転処理を行い、プラス方向からみることとし、「自己肯定感」因子と命名した。第2因子は“私にとって人間関係は苦痛である(逆転)。いろんな人間関係をととても楽しいと感じている。人間関係がうまくいかないことが多い(逆転)。大抵の人とうまくつき合っていくことができる。”を問う項目に高い負荷量がみ

られたため、「有能感」因子とした。第3因子は、「私はいろんな良い素質をもっている。能力のある人間だと思う。」といった項目に高い負荷量が見られたため、「有能感」因子とした。第4因子は「私は自分の仕事(役割・勉強など)をうまくこなす力がある。何かうまく行かないことがあるとすぐにくじけてしまう(逆転)。少々つらいことがあっても乗り越えていく力がある。」といった項目に高い負荷量が見られたため、「立ち直り力」因子とした。表3は、自信尺度の因子分析の結果である。

表3 自信尺度の因子分析：回転後の因子負荷量
クロンバックのα係数=.87

項目内容	F1	F2	F3	F4	共通性	
自己肯定感	2. 私は自分の欠点ばかり目につき、自分がいやになる。*	.832	.026	.095	-.104	.713
	13. 私は自分に対する不満が多い。*	.812	.099	-.102	.252	.751
	7. 私は何をやってもダメな人間だと感じている。*	.673	.352	.421	.045	.757
	9. 私はささいなことで落ち込み、なかなか立ち直れない。*	.634	.228	.036	.304	.548
	4. 私は失敗やうまくいかないことが多いと感じている。*	.588	.095	.405	-.026	.520
人間関係構築力	11. 私にとって人間関係は苦痛である。*	.454	.783	.076	-.085	.832
	3. 私はいろいろな人間関係をとても楽しいと感じている。	.005	.665	.081	.148	.471
	6. 私は人間関係がうまくいかないことが多い。*	.477	.644	.249	-.051	.707
	4. 私は大抵の人とうまくつき合っていくことができる。	.082	.591	.178	.287	.470
有能感	10. 私はいろいろな良い素質をもっている。	.122	.306	.866	.206	.901
	8. 私は能力のある人間だと思う。	.050	.102	.732	.132	.566
立ち直り力	1. 私は自分の仕事(役割・勉強など)をうまくこなす力がある。	.059	.125	.308	.637	.519
	12. 私は何かうまく行かないことがあるとすぐにくじけてしまう。*	.525	.265	-.054	.501	.599
	5. 私は少々つらいことがあっても乗り越えていく力がある。	.058	.427	.229	.322	.342
固有値	3.30	2.387	1.904	1.103		
寄与率(%)	23.57	17.048	13.603	7.880		
累積寄与率(%)	23.57	40.623	54.226	62.106		

4-6-3 自信尺度の信頼性

一次元性の高い尺度であるため、まず、最終的に抽出された14項目の合成得点を求め、自信尺度の信頼性をCronbachのα係数によって求めたところ、0.87という高い数値が得られた。

また、下位尺度ごとの信頼係数をCronbachのα係数によって求めたところ、第1下位尺度は0.85、第2下位尺度は0.81、第3下位尺度は0.83、第4下位尺度は0.62であり、尺度の内的整合性は十分に保たれているといえる。

4-6-4 「自信感」の変化(目的要因)

「自信感」(全体)の参加後の平均値は4.22(SD=0.69)は、参加前の平均値4.16(SD=0.63)より少し伸びているが、統計的な有意差は認められなかった(t(46)=-1.026, n.s)。そこで、調査協力者の参加前後の「自信感」の差をみたところ、伸びたグループは26人(55.3%)で、下がったグループは21人(44.7%)であった。次に、「自信感」が伸びたグループ(平均値4.43 SD=0.56)と下がったグループ(平均値3.94 SD=0.74)の間で平均値の差に関するt検定を行った結果、統計的な有意差が示された(t(45)=2.51, p<0.05)。

それでは次に、3グループの違いをみてみよう。「自信感」の語学研修グループ、海外幼児教育研修グループ、海外ボランティアグループの平均値は、以下のとおりである(図4と表4を参照)。語学研修グループと海外幼児教育研修グループの平均値は、参加後は上昇している。しかし、海外ボランティア研修グループは、3グループの中では平均値が一番高く、自信はあるが、参加後はあまり変化がみられないことが示された。

図4 目的別による「自信感」の変化の比較

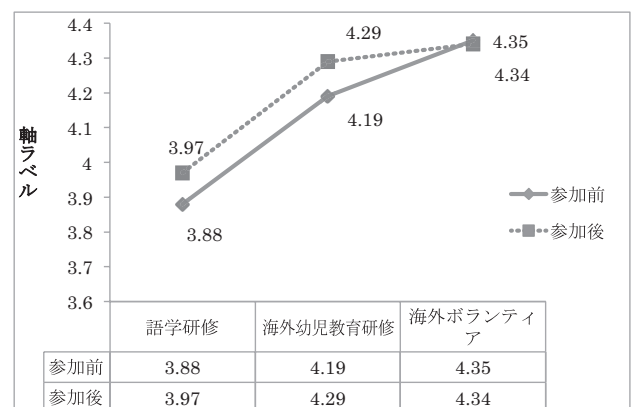


表4 自信感の平均値一覧

	参加前		参加後		参加前後の差
	Mean	SD	Mean	SD	参加後-参加前
語学研修 (n=12)	3.88	0.66	3.97	0.87	0.09
海外幼児教育研修 (n=16)	4.19	0.63	4.29	0.60	0.1
海外ボランティア研修 (n=18)	4.35	0.55	4.34	0.61	-0.01
総和 (n=46)	4.17	0.62	4.22	0.69	0.05

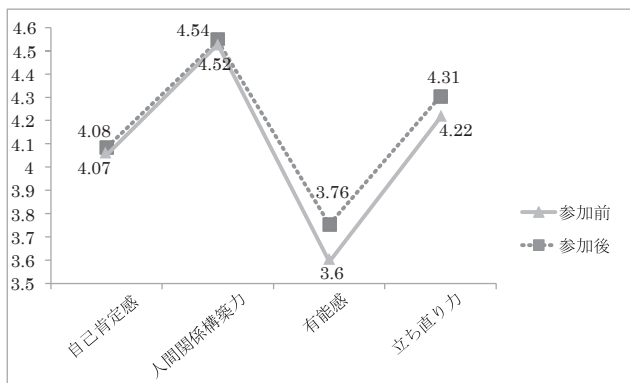
次に、参加前後の差をみるために、分散分析を行った結果、3つのグループの間には、有意な差は示されなかった ($F(2, 43)=2.19, n. s., F(2, 43)=1.11, n. s.$)。

4-6-5 自信感4因子の変化

さらに、「自信感」を構成する4因子である「自己肯定感」「人間関係構築力」「有能感」「立ち直り力」ごとの、参加前と参加後の比較をしてみる。表5を参照のこと。

表5 「自信感」の4因子の平均値

	参加後	SD	参加前	SD	pre-post 差	t 値	p
自己肯定感	4.07	0.97	4.08	0.85	-0.01	0.01	n. s.
人間関係構築力	4.54	0.89	4.52	0.79	0.02	0.02	n. s.
有能感	3.76	1	3.6	0.92	0.16	0.16	n. s.
立ち直り力	4.31	0.66	4.22	0.64	0.09	0.09	n. s.



参加前・後をみると、「自信感」4因子の中では「人間関係構築力」、「有能感」、「立ち直り力」の平均値が上昇しているが、統計学的には有意な差は示されなかった。

次に、自信感の4因子ごとに、3グループの結果を比較する。

表6 「自信感」を構成する4因子の平均値の比較 (プログラム別)

		参加前		参加後		参加前後の差
		Mean	SD	Mean	SD	参加後-参加前
自己肯定感	語学研修	3.81	1.04	3.71	1.19	-0.1
	海外幼児教育研修	4.20	1.00	4.35	1.01	0.15
	海外ボランティア実習	4.13	0.56	4.06	0.75	-0.07
	総和	4.07	0.86	4.07	0.98	0
人間関係構築力	語学研修	4.18	0.89	4.29	0.92	0.11
	海外幼児教育研修	4.70	0.58	4.62	0.77	-0.08
	海外ボランティア実習	4.66	0.81	4.76	0.83	0.10
	総和	4.55	0.78	4.59	0.84	0.04
有能感	語学研修	3.45	0.96	3.75	1.21	0.3
	海外幼児教育研修	3.18	0.54	3.53	0.64	0.35
	海外ボランティア実習	4.05	1.01	3.94	1.13	-0.11
	総和	3.59	0.92	3.75	1.00	0.16
立ち直り力	語学研修	3.86	0.45	4.13	0.62	0.27
	海外幼児教育研修	4.18	0.66	4.27	0.64	0.09
	海外ボランティア実習	4.51	0.63	4.50	0.70	-0.01
	総和	4.23	0.64	4.32	0.66	0.09

「自己肯定感」では、海外幼児教育研修グループと海外ボランティア実習グループは平均値が4以上であり、半数以上が肯定的に自己をとらえていることが示された。しかし、語学研修の学生は、平均値がやや低く、研修後は0.1下がっている。参加後は、海外幼児教育研修の平均値は高く、伸びが示された。しかし、3グループの間に有意な差は示されなかった ($F(2, 42)=1.41, n. s.$)。

「人間関係構築力」では、3グループともすでに平均値は高く、人との関係を築く能力は高い。これは人との繋がりを大事にするウチナーンチュ (沖縄) 文化がみられる。特に、参加前では、海外幼児教育研修グループの平均値 (4.70) が高い。これは、保育科の学生は、職業柄、子ども、親、保育士、地域社会との協力が重要であることを十分に認識しているためである。しかし、参加後は、語学研修グループと海外ボランティア実習グループの方が伸びている。しかし、グループの間に有意な差は示されなかった ($F(2, 42)=1.01, n. s.$)。

「有能感」の平均値では、参加前・後では、海

外ボランティア研修グループは3グループの中で一番高く、海外幼児教育研修グループはやや低い。しかし、参加後の伸びをみると、語学研修グループと海外幼児教育グループの方が高くなっている。逆に、海外ボランティア研修グループの方は若干低くなっている。統計学的にみると、海外ボランティア実習グループは、参加前には、海外幼児教育研修グループより有意に高いことが示された ($F(2, 43)=4.61, p<0.05$) が、参加後には有意な差がみられなかった ($F(2, 43)=1.15, n.s.$)。

「立ち直り力」では、海外ボランティア実習グループと海外幼児研修グループの平均値は高いが、体験後は語学研修グループの伸びが高い。一方、海外ボランティア実習の方は、参加前後の差はあまりみられない。参加前には、海外ボランティア学習グループは語学研修グループより有意に高いことが示された ($F(2, 43)=3.15, p<0.05$) が、参加後は、有意な差はみられなかった ($F(2, 43)=0.49, n.s.$)。

次に、「自己肯定感」「人間関係構築力」「有能感」「立ち直り力」の参加前と参加後の尺度間相関をみてる (表7)。

表7 尺度間相関係数

(参加前)				
	自己肯定感	人間関係構築力	有能感	立ち直り力
自己肯定感	—			
人間関係構築力	.519**	—		
有能感	.256	.248	—	
立ち直り力	.628**	.480**	.413**	—

(参加後)				
	自己肯定感	人間関係構築力	有能感	立ち直り力
自己肯定感	—			
人間関係構築力	.491**	—		
有能感	.306*	.381**	—	
立ち直り力	.491**	.511**	.386**	—

** p<0.01 *p<0.05

参加前と参加後の尺度間相関をみていると、参加前では相関が高いが、参加後では比較すると低く、特に「人間関係構築力」と「自己肯定感」、「立ち直り力」と「自己肯定感」、「有能感」と「立ち直り力」が低い。逆に、「自己肯定感」と「有能感」が高く、また、「有能感」と「人間関係構築力」、「立ち直り力」と「人間関係構築力」が高くなっている。

上の結果より、異文化においては語学ができるようになると「有能感」が高まり「自己肯定感」と「人間関係構築力」が高まる。また、「人間関係構築力」が高まると、「立ち直り力」がでてくるものと推測できる。

4-7 「自信感」とキャリアプランにおける

「国際志向性」

4-7-1 対応のある t 検定の結果

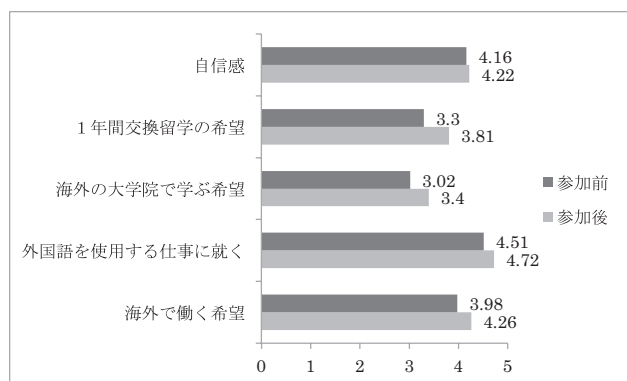
「自信感」の平均値と、キャリアプランにおける「国際志向性」に関する4つの質問である「1年間交換留学の希望」「海外の大学院で学ぶ希望」「外国語を使用する仕事に就く希望」「海外で働く希望」の中では、「1年間交換留学の希望」が有意に平均値が高くなったことが示された (表8)

表8 自信感と国際志向性に関する質問項目の平均値・標準偏差と対応のある t 検定の結果 (N=47)

	参加前		参加後		差	t	fd	p
	Mean	SD	Mean	SD				
自信感	4.16	0.63	4.22	0.06	0.69	1.026	46	0.31
1年間交換留学の希望	3.30	1.78	3.81	1.49	0.51	2.479	46	0.017*
海外の大学院で学ぶ希望	3.02	1.51	3.40	1.33	0.38	1.845	46	0.071
外国語を使用する仕事に就く	4.51	1.41	4.72	1.11	0.21	1.652	46	0.105
海外で働く希望	3.98	1.52	4.26	1.25	0.28	1.952	46	0.057

国際志向性に関する4つの質問の平均値を比較してみると、調査協力者は、海外の大学院で学ぶことはあまり希望していない傾向にあるが、外国語を使用する仕事に就くことを希望していることが示された (図5)。

図5 自信感と国際志向性に関する質問項目の参加前と参加後の平均値の比較



また、一元配置分析の結果、「外国語を使用する仕事に就く」と「将来海外で働きたい」の参加後では、それぞれに有意に平均値が高くなったことが示された ($F(2, 43)=14.24, p<0.05$ 、 $F(2, 43)=10.593, p<0.05$)。さらに、多重比較の結果、語学研修グループと海外幼児教育研修グループとの間、また海外ボランティアグループと海外幼児教育研修グループの間に5%水準で有意差がみられた。

4-7-2 1年間交換留学の希望

語学研修に参加した学生の平均値と海外ボランティア学習に参加した学生の平均値(評定が1から6)は、参加前より伸び、4.0以上であった。ただし、目的別では、平均値に有意な差はみられなかった。語学研修グループの平均値(参加前平均値3.25, $SD=1.76$; 参加後平均値4.08, $SD=1.83$)と海外幼児研修グループの平均値(参加前平均値2.88, $SD=1.58$; 参加後平均値3.25; $SD=1.00$)と海外ボランティア研修グループの平均値(参加前平均値3.56, $SD=1.91$; 参加後平均値4.00, $SD=1.53$)では、参加前と参加後も、有意な差は見られなかった。

4-7-3 海外の大学院で学ぶ希望

海外幼児研修に参加した学生の平均値は2.25から3.25へ伸びていた。目的別では海外ボランティア実習グループの平均値(参加前平均値3.50, $SD=1.65$; 参加後平均値3.61, $SD=1.03$)が、参加前では海外幼児教育研修グループ(参加前平均値2.25, $SD=1.00$; 参加後平均値3.25, $SD=1.06$)より、有意に高いことが示された($F(2, 43)=3.52, p<0.05$)。しかし、参加後では、

3グループ間の平均値には有意な差はみられなかった。

4-7-4 外国語を使用する仕事に就く希望

語学研修と海外ボランティア研修に参加した学生の平均値は、参加前と参加後とも、5.00以上で、英語を使用する職に、就きたい気持ちが高いことが示された。目的別では、平均値に有意な差がみられた。海外ボランティア実習グループの平均値(参加前平均値5.33, $SD=0.76$; 参加後平均値5.28, $SD=0.82$)が、参加前も参加後も海外幼児教育研修グループ(参加前平均値3.13, $SD=1.31$; 参加後平均値3.75, $SD=0.85$)より有意に高く、また、語学研修グループの平均値(参加前平均値5.00, $SD=0.85$; 参加後平均値5.08, $SD=0.99$)は、参加前と参加後も海外幼児教育研修グループの平均値よりも有意に高いことが示された($F(2, 43)=22.47, p<0.05$; $F(2, 43)=14.24, p<0.05$)。

4-7-5 海外で働く希望

海外ボランティア研修に参加した学生と語学研修に参加した学生の平均値は、それぞれ、4.6以上であり、海外で働く希望が高いことが示された。目的別では、平均値に有意な差がみられた。海外ボランティア研修グループの平均値(参加前平均値4.78, $SD=1.06$; 参加後平均値4.78, $SD=0.94$)が参加前と参加後も海外幼児教育研修(参加前平均2.69, $SD=1.13$; 参加後平均値3.25, $SD=0.93$)より有意に高く、また、語学研修グループ(参加前平均値4.33, $SD=1.49$; 参加後平均値4.67, $SD=1.30$)は海外幼児教育研修グループより有意に高いことが示された。

5. 結果のまとめと考察

5-1 調査協力者

本調査の協力者は46人で、大学1, 2年生(19才と20才)が全体の84%を占める。また66%(31人)が過去の渡航経験はない。特に、ハワイ語学研修と海外幼児教育研修では71%(21人)、海外ボランティア研修では55.6%(10名)が初めての海外体験である。

英語力に関しては、全部のデータは得ることができなかったため、一般化は難しいが、英検準2級のレベル及びTOEIC-IPテストスコアは400点以下が多いため、高卒レベルの英語力(=

卒業生の平均が英検準2級から2級程度)には到達していないといえる。しかし、約9カ月間アメリカに留学した学生もいるし、またTOEIC-IPテスト600点以上のスコアをとったレベルの高い学生も含まれていた。

外国語使用不安感では、参加前では、平均値4.04の高い不安感を持っており、語学研修参加者が一番不安を感じており、その後は、海外幼児教育研修参加者、海外ボランティア実習参加者の順である。参加後では、平均値が3.53と少し減少し、ハワイ研修、海外幼児教育研修、海外ボランティア実習の順で、不安が減少している。

5-2 「自信感」およびキャリアプランにおける「国際志向性」は参加後伸びた。

「自分のあり方に自信を持っている感覚、あるいは自分に対して自信をもって生きていると感じられていることである」(高井、2011)という自信感が、海外体験によって向上したことが示唆された。平均値は4.16から4.22に上昇した。同時期に海外体験をしない統制群との比較を行わなかったために、この上昇が海外体験による効果であるとその妥当性を確かなものにはできない。しかし、自信感尺度は自尊感情と高い相関関係があり(高井、2011)、海外体験による自尊感情の向上を報告する研究(早矢仕、2002)があることにより、「自信感」の向上は海外体験による影響と推定してよいであろう。

「国際志向性」については、「1年間交換留学の希望」、「海外の大学院で学ぶ希望」、「外国語を使用する仕事に就く希望」、「海外で働く希望」の4項目に回答してもらったが、いずれも伸びた。

5-3 海外ボランティア研修参加者は語学研修参加者に比べ、参加前、参加後とも「自信感」が高く、特に「人間関係構築力」と「立ち直り力」が高かった。しかし、語学研修者と海外幼児教育参加者の「自信感」の伸び幅は大きかった。

海外ボランティア研修参加者は、参加前後ともに語学研修参加者より「自信感」の平均値、特に「人間関係構築力」「立ち直り力」が高いことが示された。語学研修は、大学が参加者を募集し団体で派遣するため、交通手段もすべて旅行会社によって手配され移動も団体行動である

し、また現地には頼れる仲間(教師、ホストファミリー、ハワイの日系人、日本語を専攻している学生、沖縄の県人会など)が多い。一方、海外ボランティア研修の場合は、普通は基本的に個人参加で交通手段は自ら手配し、また目的地まで1人で行動するケースが多く、トラブルに遭遇する確率も多いため「立ち直り力」が求められる(仲野、2014)。しかし、本学の場合は、授業の一環としての団体行動である。滞在中は、気候の違いや衛生環境の悪さからくる問題や食生活の違いに対処しながら、また、英語を使用して周りの人々と良好な人間関係を構築し、受け入れ団体の企画に貢献することが期待されるので、情緒面、行動面の負荷が高くなる。よって、その困難さを予知して自分はやっていけるという自信がある学生が研修に申し込んでいるのだろう。また、フィリピンでの研修は、学生たちにチャレンジ精神と忍耐力を要求するので、参加前と参加後の平均値は高かった。

語学研修参加者と海外幼児教育研修参加者は「有能感」の伸びがボランティア参加者に比べ大きい。この理由としては、両方のプログラムは、海外ボランティア研修と比べ、現地で生活する中で英語力の向上を感じた割合が高いことによるのではないかと考える。自由記述の中でも、「自分の英語が伝わったこと。自分に自信がなかったけど、この研修で自信を持てた。」との回答があった。

また、「人間関係構築力」の伸びも大きいことから、現地のハワイの人達、クラスメートやホストファミリー、英語・観光学・フラダンスの先生たち、日本語専攻の学生たち、観光学の授業で訪れたホテルの従業員や熱帯植物園の職員、日系の学生達、県人会のひとつとちとの出会いがあり、良好な人間関係作りを心がけたと思われる。自由記述の中でも、現地の人達との交流、特に「ホームステイが楽しかった。人との関わりがすごく心に残っている」「子供たちとのふれあい」「バスの中での乗客、運転手、ホテルのフロント係りと出会い」「日本語の学生との交流」などをあげている。

特に、海外幼児教育研修参加者の場合も人間関係構築力は高い。保育科の学生の場合は、言葉だけでなく、具体的体験(図画工作、紙人形、おどり、音楽など)を通して、現地の人と関わ

る点が、語学研修の参加者とは異なる。自由記述の中でも、「海外の幼児とのかかわり」「カウアイの子供たちと遊んだこと」「ホームステイ先との交流、フラダンス、レイ作り」「ハワイの人々との交流」「Pre-school 見学」「日本語の学生との交流」などが楽しかったと述べている。

6. 海外研修についての提言

以上の結果から、いくつかの提言を述べたい。

1) 現地では毎日、ESL での英語の授業を提供すること。

学生の自信感形成においては、語学力が大きいことが明らかとなった。言語を学ぶことは、情報伝達・交換のための、単なる道具としてではない。我々はいつも言語の中に住みこんでいる。アメリカの哲学者の J. デューイによれば、言語はあらゆる意味を生みはぐくむ慈母である。言語を学ぶことで、人はその言語共同体の人達との相互主観的な世界に入ることができる。

学生の自由記述からも、「会話に割ってはいることができず、とても静かになったり、シャイになってしまった」「聞きとれるけど、意見を述べられない」「伝えたいことが伝えれない。メニューがわからない」「語学力が未熟。うまくお礼が伝えられなかった」「英語で自分の考えや気持ちを伝えられなかった」「やはり言葉、Homestay の時は、本当に大変だった」「KCC での授業の課題」「プレゼンで質問にうまく応答できなかった(語学研修参加者)、また、保育科の学生からも「英語で話すこと、きくこと」「やはり英語が喋れず、英語科と比べるとだいぶコミュ能力がおとる」「言葉の壁」「言葉が通じなくて大変でした」「あまり英語ができないので、伝えることが難しかった」「英語を理解すること」と「英語で文章を書くこと」が難しいがでてきた。

ハワイ(語学)研修は、現在のプログラムでは、ハワイの歴史・文化と観光を学ぶことが強調されているが、参加する学生の英語力を考えると、午前中は毎日、ESL の授業を集中して行うことを提案したい。まずは、授業で英語を学べる環境を確保し、午後からは英語を使う。観光やハワイ文化の授業、施設見学、そして、自由行動を入れることが重要である。毎日の生活の中で、彼らが直面した英語の問題(例えば、異なる表現方法など)を、翌日の英語の授業に取り入れ

ていく方が、学生の英語力向上につながるのではないだろうか。上記の英語の問題も、授業の中で学び、使えるようになると、彼らの不安は減少し、「有能感」と「人間関係構築力」が向上し、「自己肯定感」が高まるものと思われる。

また、海外ボランティア実習参加者からも、「言葉が通じないこと」「英語力が足りないと思った」「英語力をもっと身につけて行くべきだったと思います」の意見がでてきた。フィリピンの場合、言語はタガログ語であるので、事前に、外部の講師を招いて勉強をしておくことと、媒介後としての英語の勉強が必要である。

2) 今後の海外ボランティア実習では、プロジェクト学習を取り入れる。

海外ボランティア研修は1週間のプログラムで、現地には5日間のみ滞在する。学生の記述のなかでも、「空気が汚くて、苦しかった」「衛生環境の悪さ」「気温が暑くて大変だった」「食生活の違い」「治安の悪さ」「トイレの使い方」などが指摘されている。ある学生は、「フィリピン到着後、息ができない、下痢、結膜炎にかかり、三重の苦しみを経験し、現地に対してネガティブな印象を持った」と語った。この時期はアドラー(1975)の異文化適応曲線の6段階の中の、第2段階(自己崩壊)と第3段階(自己再統合)にあたる。これらのショックや戸惑い・心身の疲労は誰でもが異文化で経験することであり、事前研修では、ストレス対処法を身に付けるべきである。

次の研修としては、内容を「ボランティア」から「プロジェクト学習」にする「海外ボランティア研修 II」を提案したい。学生の中には、現地でのサバイバルが大変で、途上国の人達のために何かをしたという実感がないと述べていた。そこで、今後は、一つの活動に絞り、例えば、児童養護施設で算数や英語を教えるとかの活動である。つまり、現地のもの考え方や感じ方が違う人たちと折り合いをつけながら活動することが重要で、活動する相手は、必ずしも英語がネイティブのひとではない。他者とさまざまな目的のもとでプロジェクトを遂行しながら自らの学習を進めることができる。学外では常に教師と学生という安定した人間関係や固定化した力関係を前提に学習を進めるが、学外で

は負の人間関係や予期せぬ関係性の変容などもありうる(久保田、2012)。特に、学生がプロジェクトで出会う人々は、性別、年代、学歴、職歴、国籍、人種、信条など多種多様な人々であり、そのような多様な文化背景を持った人々とコミュニケーションをすることで信頼関係を築いて目的を遂行しなければいけない。異文化の中での折衝は気骨が折れ、時間・エネルギーがいり、人間関係の失敗や挫折もあるが、交流・交渉を経て、関係の維持・構築がなされ、「立ち直る力」と「人間関係構築力」が養われてくるのではないかと考える。

3) 学生同士が経験を振りかえる場を設けること。

学生たちは、異文化においてカルチャーショックを体験しているが、人との関わりの中で多くの学びと発見をしている。自由記述をみると、ハワイ研修と海外幼児教育研修では「ハワイのおもてなしとやさしさに触れて感動した」「ハワイの人とたくさん交流ができた」「ホームステイ。カウアイの子供たちと遊んだこと」「ホームステイが楽しかった。人との関わりがすごく心に残っている」。また、「現地のひとと触れ合えたこと。同じキリ学の人と、さらに仲良くなった。日本と海外の違いがわかった」「この研修で自信がもてたが、以外な自分にも気づけた」などの意見がみられた。

海外ボランティア研修参加者からは、「いろいろな生活があること。子供たちと触れえたこと」「個人的で魅力的な人たちとの出会い、関わった時間や外の世界を学べたこと」「ホームステイで現地の人の温かさを感じたこと」「店員とおしゃべりしたり、通じないけれどそれが新鮮で楽しかった」「自分の視野が広がった」「同じ世代の人達との交流」「JRED ホームステイ先の子供たちが、とてもきらきらしていて、暮らしは裕福ではないけれどとても幸せそうで心に残っている」「行く前に想像していたものより、はるかに超えていて、自分の考え方が変わった。人のためにできることをしたいと強く感じた」との意見があった。

青年期における留学のインパクトに関する研究(横田、1997)では、高校生と大学生の留学の違いを以下のように述べている。高校生では、現地ではかなり大きな態度・行動の変化を示す事例がまれではなく、帰国後の再適応に困難を

予想されるものもあるが、大学生では、一般的に態度や行動に現れる変化は高校生に比べて小さいが、認知的なレベルで両文化の差異を調整したり解釈したりする力があるという。上記の学生のコメントからも、比較文化的視点の獲得から認識の枠組みが変化(=成長)していることがわかる。

そこで、学生が海外体験を振り返り、経験に意味づけをすることが次の経験をより豊かなものに行うことができる。帰国後は3つのグループの短期海外研修者たちの集いを開催してみたらどうだろうか。学生がグループで集まり、お互いの感想や意見を述べることで、たとえ、蓄積した知識や経験は違っても、他者の対象への視点の違いに気づき、そのうえで自己の経験を反省的に捉えることができれば、徐々に、自分の経験が豊かになっていく。つまり、多様な経験をグループで反省することで、各自の志向性が明確になり、自分にとっての経験の意味を拡充することができるだろう(久保田、2002)。

7. おわりに

本調査は、大学が実施している短期の海外研修プログラムが学生の自信感到どのように影響しているのかを調べた。本論文はアンケート調査結果の一部のみの報告である。今回、統制群(海外研修に参加しなかった人たち)を置かなかつたため、「自信感」や「国際志向性」の伸びが海外体験の効果であるという妥当性を確かなものにできないのが限界である。

しかし、本研究において、高井(2011)の調査と同じように、「有能感」「自己肯定感」だけではなく、「生きる力」にも関係してくる「人間関係構築力」や「立ち直り力」も自信感を構成する重要な要因であることが見出されたことは本研究の意義だといえる。今回は自信感の尺度(14項目)を用いて分析したが、まだ「自己効力感尺度」の分析が残っているので、今後は自信感、自尊感情、自己効力感の観点から、大学生の異文化体験の効果について研究を続けていきたい。

謝辞

今回の調査に協力してくれた短大の英語科と保育科の学生と4大の英語コミュニケーション学科の学生たち50名に、心より感謝申し上げます。また、彼らとの出会いの機会や、参加前と参加後のアンケート調査の日程調整や回収に協力して下さった国際平和文化交流センターの内間貴士さんと、「海外ボランティア実習」の担当者である新垣誠先生にはお礼を申し上げたい。さらに、国際教育交換協議会(CIEE)日本代表部の仲野友子先生と東京情報大学総合情報学部の内田治先生には、統計分析に関して貴重なご助言をいただき感謝申し上げます。

- 1 本学では「ハワイ研修」と呼ばれているが、他の二つのグループとの目的の違いを明らかにするために、本論文では、「語学研修」と呼んでいる。
- 2 SD(Standard Deviation)とは標準偏差のことである。
- 3 外国語能力の向上に関する検討(2011).
国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的政策—英語を学ぶ意欲と使う機会の充実を通じた確かなコミュニケーション能力の育成に向け—文部科学省

引用・参考文献

- Adler, P. (1975) The transitional experience: An alternative view of culture shock. *Journal of Humanistic Psychology*, 15(4), 13-23. (近藤裕訳)『カルチャ・ショックの心理』創元社。
- グローバル人材育成推進会議 (2012) 審議まとめ。
<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/>
- 久保田真弓 (2012) 「経験」と「コミュニケーション」の関係」、久保田賢一・岸鷹貴子『大学教育をデザインする』(pp.115-133)、晃洋書房。
- Gmelch, G. (1997). Crossing Cultures: Student travel and personal development, *International Journal of Intercultural Relations*, Vol.21, No.4, pp. 475-490.
- 坂井雄二・東條光彦 (1993) セルフ・エフィカシー尺度作成の試み。上里一郎 (監修)『心理アクセスメントハンドブック』(pp.478-489) 西村書店。
- Sherer, M. & Maddux, J. (1982) The self-efficacy scale: Construction and validation, *Psychological Reports*, 51, 663-671.
- 高井範子 (2011) 自信感形成要因および自信感の発達の变化、健康心理学研究、24、pp. 45-5
- 田島賢侍・奥住秀之 (2012) 子どもの自尊感情・自己肯定感等についての定義及び尺度に関する文献検討、東京学芸大学紀要、総合教育科学系II、64、19-30.
- 鉄川大健・谷口淳一・森下高治 (2015) 異文化体験前の個人的特性から見る異文化体験者の不適応感、帝塚山大学心理研究、第4号、pp. 39-49.
- 早矢仕彩子 (2002) 日本人学生の留学経験と自己に関する意識の変化に関する縦断的研究、静岡大学人文学部人文論集、53巻、1号、pp. 39-55.
- Paige, M. (1993) On the nature of intercultural experiences and intercultural education. *Education for the intercultural experience*. pp. 1-19. Yarmouth, ME: Intercultural Press.
- 仲野友子 (2014) (国際教育交換協議会日本代表部) CIEE アンケート調査結果報告1—短期海外留学には自信感や国際志向性を向上させる効果があるのか—、
- 仲野友子 (2014) 短期海外体験における自信感の形成要因、多文化関係学会第12回年次大会発表抄録
- 中村裕介・石川悟 (2010) 異文化接触が価値観に与える影響、日本パーソナリティ心理学会発表論文 (19) , p. 25
- 成田健一・下仲順子・中里克治他 (1995) 特性的自己効力感尺度の検討、教育心理学研究、第43号、第3号、pp. 306-314
- Yashima, T. (2010). The effects of international volunteer work experiences on intercultural competence of Japanese youth, *International Journal of Intercultural Relations*, 34, pp. 268-282.
- 安福恵美子 (1994) 海外観光旅行で意識変革は起こるのか、現代のエスプリ: 異文化接触と日本人、pp. 135-144.
- 横田雅弘 (1997) 青年期における留学のインパクト、文化とこころ: 多文化間精神医学研究, Vol. 2, No. 1, 12-16.
- 米盛裕二 (1969) 「デューイの言語思想」『デューイ研究: デューイ来日五十周年記念論文集』日本デューイ学会編。

A Study of the Impact of a Short-term Study Abroad Undertaken by College Students: Focused on Students Confidence-building

Masako Isa

Abstract

The purpose of this study was to examine how three kinds of overseas short-term study programs, such as an intensive language program, a program in early childhood care and education, and volunteer work-study had an impact on college students' confidence-building. Factor analysis of the Confidence Scale scores identified four essential factors for developing confidence: "self-affirmation" "ability to build interpersonal relationships" "sense of capability" and "ability to recover," all of which suggest that confidence encompassed not only factors pertaining to competence and self-evaluation, but also to their ability to build interpersonal relationships and to recover from difficult situations.

Members of the overseas volunteer work-study group scored high on confidence building, especially, in the "ability to build interpersonal relationships" and the "ability to recover" in the pre-test and post-test compared with members of the intensive language program. On the other hand, in the intensive language program and early childhood care and education groups, members' scores in confidence building appeared to have improved because of their intercultural experience. These findings, however, suggest that further study on the impact of study abroad of college students should be carried by using a confidence-building scale including a self-efficacy scale (SES).

Keywords: college students, study abroad, short-term, an intensive language program, a program in early childhood care and education, voluntary work- study, confidence-building